

「GBIF 日本ノード委員会」議事概要

開催日時：2007年1月31日（水）13：00～14：30

開催場所：独立行政法人科学技術振興機構 東京本部（サイエンスプラザ）6階会議室

参加委員：伊藤委員長 上田委員 菊池委員 志村委員 白山委員 菅原委員 松浦委員
馬渡委員 宮崎委員 山崎委員

オブザーバー：文部科学省研究振興局ライフサイエンス課 係長 中山 亮
係員 竹内 佑介

科学技術振興機構 キーテクノロジー研究開発業務室 荻原 克俊
科学技術振興機構 研究基盤情報部 井上 聡子

事務局：国立遺伝学研究所管理部研究推進室

（欠席委員：岩槻委員、佐藤委員、城石委員、多田内委員）

【冒頭】

伊藤委員長より本委員会開催の経緯等説明の後、オブザーバーの紹介があり、文部科学省ライフサイエンス課中山係長から挨拶があった。

【議題】

1. 「平成18年度事業報告」について

資料2に基づき、菅原委員から国立遺伝学研究所の事業内容についての説明があり、次いで資料3に基づき、伊藤委員長から東京大学の事業内容についての説明があった。その後、資料4に基づき、松浦委員から国立科学博物館の事業内容についての説明があった。

質疑応答の概要は以下のとおり

- ・ 来年度に100万件を達成したいという件は科学博物館のサーバーから発信するデータでしょうか？
→ 日本では国立遺伝学研究所と国立環境研究所からの公開分を合わせるとデータ登録は100万件を突破するだろう。現状では韓国は90万件と日本を抜いているが、4月には日本の登録数が韓国の件数を越すことができると思われる。
- ・ 博物館でデータ登録をするための入力は館の職員が行っているのか？また、入力ツールは無料なのか？入力のための人件費などの問題はどうか。
→ 入力ツールは無料。各博物館への啓蒙活動を行っている。入力はそれぞれの博物館で行っているが、地方自治体などが設置している博物館では指定管理者制度を導入しているところや、今後導入するところが多くなっており、管理業者が変ることでデータ登録などの継続性が保ちづらくなる状況がある。また、人員削減もあり、ある県では学芸員が展示場に立たざるをえなくなるような危機的な状況もおきている。
→ 標本の電子化は本研究課題では対象外であるが、JSTのプロジェクトにおいて一部行われている。
→ 地方自治体にある博物館では県や市の税金で運営しており、そのことからGBIFなど他にデータ提供することに行政側が難色を示すところもある。しかし、文科省の進めている事業ということで、ご了承いただけることが多い。

2. 「国内関連活動の拡充方策」について

資料5に基づき、菅原委員から生物多様性に関するワークショップについての報告があった。続いて、資料6に基づき、菅原委員からGBIFの活用例に関する説明があり、以下の質疑応答があった。

- ・ 国土交通省の河川整備のときなどにデータを提供している。地域だけでなく、そこにい

- る昆虫や植物も大切であるので、そのようなデータを余り持っていないところは GBIF のデータは非常に役立つと思う。同定の精度の向上は今度の課題になると思う。
- ニーズとしてはカルタヘナ条約に関して野生種の基礎データがあると思う。現時点では必要なデータがない。調べたい人が日本の野生動物の情報を手に入れられる仕組みが重要であり、GBIF の使命だと思う。データの整備によって分布データや影響を受ける生物が何かということがわかるようになると思う。同定精度の向上にはクリーニングツールなどのアプリケーションの開発をするなど努力している。
 - 省庁の横断的な活動が必要だと思う。各省庁がそれなりのデータを蓄積していると思うので、何を持っているかを教えていただき、省庁を横断した連携も作れるとよいと思う。
→OBIS では海上保安庁がデータをたくさん持っていることがわかった。また、海上保安庁が提供に前向きな姿勢を示しており、サーバーの管理等の検討事項はあるが、よい方向に進みつつある。
→海上保安庁のデータは研究者レベルでは手に入れることはできるが、申請の手続きが必要であり、どの研究者でも使えるというものではない。
 - 10月のワークショップにて「生物多様性研究のコミュニティの方がデータを出し合い、データをみんなで利用するという考え方に、少しだけ転換してもらえただけで、GBIF 活動が飛躍的に進む」という印象を得た。データを共有するメリットがあることを訴えていきたい。
→森林に関するデータは農林水産省がたくさん持っているので協力いただけるとよいと思う。
→近い将来に大量のデータを出せる可能性がある GEOS とのコミュニケーションも重要だろう。
 - ツールを使って個々の機関で GBIF データ公開までできるのか？また、データを自分でも公開しているサイトはあるか？
→現状では誰でもできるという状況にはなっていない。日本では遺伝研、科学博物館、環境研でしか発信していない。DarwinCore で項目数が 48、ABCD Schema だと 700 項目程度あり、自分のデータベースの項目と GBIF 標準の項目とのマッピングについては少し知識が必要である。希望があれば人を派遣するなどサポートをすることは可能。
→小さな博物館では人が少なく、データ公開の対応ができないため、大きい博物館にまかせ、アクセス数などの報告を受けるという形でやっている。

伊藤委員長から次年度のワークショップ開催について委員から意見を伺いたいとの発言があった。委員から会場アンケートでも毎年開催してほしいという要望があり、開催する方向でよいのではないかという発言があり、来年も開催することで意見が一致した。

- 省庁間で連携し、各省庁でどのようなデータを収集しているのかがわかるようなものがよいのではないか。そのデータがどういう使われ方をしているのかも知りたい。
- ポスターセッションのような参加型のものもよいのではないか。GBIF に積極的にデータ公開したいという人もいると思うので、実践的なデモンストレーションのようなこともやってもよいのでは。
→一番簡単な方法としてはエクセルで表を作り、佐藤委員が作ったツールでデータ公開できるフォーマットに変換する方法がある。佐藤委員の同意があれば、日本ノードとして普及させることも可能だと思う。
- 開催時期についてはポスターセッションできるような大きな会場は 1 年以上前から押さえなければいけないが、科学博物館での開催は可能かもしれない。
- GBIF のターゲットは今までの議論だとプロ向けの DB だと理解している。しかし、ネットを見ると、研究者が個人的に作った学名の辞書などが多くあり、利用されている現状がある。利用されることに意義があるという考え方に立つと、GBIF で作った植物の辞書などを成果として出せるのなら出したほうが良いのでは。
→博物館からの要望があり、一部は提供できている。ツールはインターネットでダウンロード

ドしたり、ATOK に組み込んでフリーに利用するものも開発している。植物はできているが、昆虫はニーズが高いがまだ完成はしていない。
→学名辞書の問題点は学名の変更が頻繁にあり、日頃のメンテナンスが必要。
→GBIF もプロ以外にも使ってもらえるように、普及のためのサイト等の取り組みも必要だと感じており、将来的にはやっていきたい。

伊藤委員長からワークショップについては組織委員会を立ち上げ、開催時期や内容については今後、検討していきたいとの発言があった。

- 標本の DB は画像が入っていないものもあるので、正しく同定されていないと意味がないのでは。セキュリティも大切であろう。標本データが GBIF に登録されていれば、館の運営管理者がむやみに捨てられなくなるのではないか。
→標本に関する問い合わせは博物館に行き、標本の貸し出しの要望は内容にもよるが対応できるようにはなっている。同定の精度は海外でも属レベルや科レベルで間違っていることもあり、際限がない。
→GBIF のデータも第3者による検証があると精度が高まっていくだろう。
- 新しい学名と古い学名をリンクさせる仕組みを作る予定。キク科植物チェックリストを作っているプロジェクトがあるが、今年いっぱいそのプロジェクトが動いているのでその結果を見守っているところである。

伊藤委員長から謝辞が述べられ、今後についてはメール等にて連絡を行いたいとの発言があり、委員会を閉会した。

以上